

書評

Jane Ford, Kim Edwards Keates,
and Patricia Pulham, editors.

*Economies of Desire at the Victorian Fin de Siècle:
Libidinal Lives*

New York: Routledge, 2016.

角田信恵

わたしたちはあふれんばかりのモノに囲まれて暮らしている。断捨離という言葉がしばしば聞かれるのも、わたしたちが必要にかられてではなく、欲望にかられてモノを買っているせいだろう。欧米において、こうした、いわゆる消費社会が出現したのは、19世紀末のことであった。経済活動の力点が生産から消費へと移り、欲望が経済の範疇に組みこまれるようになったのである。この時代の生産から消費へというエトスの推移は、経済に関する領域に限られたことではない。それまでは労働力の再生産のための性行動だけが特権化されてきたのに対して、19世紀末には多様なセクシュアリティが言説の制度に浮上してきた。経済活動における動向と同じく、性行動も、社会的必要性よりは、むしろ個人の欲望の発露とされる方向へと大きくシフトしていった時代だったのである。

「欲望の経済」と題された本論集は、こうした前提にたって、「ヴィクトリア朝世紀末の文学（と文化）において、セクシュアリティと欲望と経済活動はいかに交差しているか、そしてそれはなにゆえか」(2)という問を共通の問として提示する。ジェンダー研究やセクシュアリティ研究、クイア研究の理論的発展が19世紀末の文学や美学に関する研究に果たした役割は大きかった。それがここ15年ほど、そうした理論が行きつくところまで行ってしまい、そうした理論によってたつ文学や美学の研究が一種の閉塞状況に陥ってしまったかの感がある。こうした状況のなか、19世紀末の文学を論ずるにあたって、経済という補助線をひい

てみようというのである。

本論集は全9章が3章ずつひとまとまりにされ、大きく三部に分けられている。

第一部は「欲望の表現」("Articulating Desire")と題されている。ここでは、リビドー経済の言語化をめぐって、欲望と言語がせめぎあうさまが論じられる。ここで論じられるのは、オスカー・ワイルドの『サロメ』における欲望の言語化の問題であり、A. E. ハウスマンの『シュロップシャーの若者』におけるバラッドという形式が強い経済と口にできない欲望の拮抗であり、アーサー・シモンズの『London Nights』における嗅覚を介した欲望の記憶の言語化という問題である。

次にくるのは「流通する身体」("Human Currencies")というセクションで、男たちの市場において(女の)肉体が交換の具とされることに、女の著作家たちがさまざまな方法で試みる抵抗が考察される。このセクションで扱われる作家は、エイミー・リーヴィ(Amy Levy)、ジューナ・バーンズ(Djuna Barnes)(この論集で扱われている唯一人のアメリカ人だ)、ヴァーノン・リー(Vernon Lee)、それにチャールズ・キングズリーの娘であるルーカス・マレット(Lucas Malet)といった具合で、第一部で扱われた男の著作家たちと較べると、これまで論じられたことの少なかった女の著作家たちである。このセクションの最初の章にあたる第4章では、エイミー・リーヴィとジューナ・バーンズの詩に共通する死んだ女というモチーフに光があてられ、男たちのテクストが称揚したこのモチーフが、女のホモエロティシズムをひそかに書きこむ場とされるさまが論じられている。第5章ではヴァーノン・リーの幽霊物語がとりあげられて、家父長制社会における贈答品としての女が、逆に欲望の主体として立ち現れる可能性が論じられる。第6章はルーカス・マレットの*The Far Horizon*(1906)をとりあげて、利己心を内包する贈与という行為に、利己心を超えた精神の経済をみてとろうとしている。

「演じられるクイアネス」("Queer Performativities")という表現でまとめられた第三部では、体制的な異性愛とは異なるセクシュアリティの経済が、パロディやロール・プレイといったテクストの策略によって、表出されたり、されえなかつたりする次第が検討される。このセクションの最初のふたつの章で扱われるのは、第二部の女の著作家たちと較べても、さらに論じられることの少なかった同性愛の著作家たちだ。ほとんど忘れられた、もしくはなんとなくうさんくさい存在としてかすかにその名前が記憶の片隅にとどまっているにすぎない著作家たちである。第7章で論じられるのは、ステンボック伯爵(Count Stenbock)。彼については、著作家としてもデカダンとともに二流の存在だと従来考えられてきた。本章においてもその評価は変わらない。本章においては、彼の失敗は、彼がデカダン

のセクシュアリティを十全に演出することができず、それをキャンプ的な転覆の契機になしえなかつたことによるとされる。第8章でとりあげられるコルヴォー男爵(Baron Corvo)の場合は、イギリス人の男とイタリア人の若者のSM的な性関係がほとんどあからさまな物語が、ワイルド裁判後のホモセクシュアル・パニックの時代に好意的に受けいれられたのはなぜかという問からはじめて、その理由の一端をふたりの男の身分差に帰している。さらに、偽男爵であった著者自身が赤貧の暮らしをしていたことからすれば、イタリア人の若者に対するイギリス人の男の権力の濫用は、まさにそうした権力の濫用を批判することをねらつてのことであったとする。第9章で扱われるマイケル・フィールド(Michael Field)が、キャサリン・ブラッドリー(Katharine Bradley)と彼女の姪のエディス・クーパー(Edith Cooper)が共作のために用いたペンネームであったことは、かなり知られた事実だろう。いわゆるレズビアンの関係にあったこのふたりについては、ステンボック伯爵やコルヴォー男爵に比すれば、近年急速に研究がすすみつつあるからだ。この章は、彼女たちの文学的、自伝的テクストを用いて、それらにクイアな含意を読みとりながら、ふたりが必ずしも一心同体ではなく、ジェンダーの点でも著作家としてもきわめて流動的なありようをしていたと論じている。

よく知られた著作家については簡単に、あまり知られていない著作家については多少踏み込んだかたちで内容を紹介してきたが、こうしてみると、この論集における経済という語／概念の多様性が浮かびあがる。いわゆる貨幣経済そのものが論のなかに組みこまれているのは、ルーカス・マレットを扱った章とコルヴォー男爵を扱った章だけで、その他の章においては、経済とは欲望の比喩であったり、欲望に対立するものの比喩であったり、さらには当然ながら、リビドーの流れの謂いであつたりする。そうした点からすれば、ヴィクトリア朝世纪末の文学において「セクシュアリティと欲望と経済活動」はいかに交差しているかという本論集の当初の間に、本論集は必ずしもストレートな答を提示してくれているわけではない。むしろ、この論集でとりあげられている著作家たちのなかで、おそらく異性愛者であったであろうと言えるのがアーサー・シモンズとルーカス・マレットだけで、残る著作家たちについては、いずれの論も同性間の欲望に踏みこんでいるところからすれば、本論集は従来のジェンダー研究やセクシュアリティ研究、クイア研究の成果に大きく依拠しつつ、そうした研究の動向の閉塞感をうちやぶろうとする試みのひとつだと言える。実際、全体としてこの論集に閉塞感は感じられなかつた。ひとつには、あまり論じられることのなかつた著

作家が多数とりあげられていることがあるだろうし、もうひとつには、欲望を構造としてよりは、流通・流動するものとしてとらえている論が多いからだろう。本論集の「欲望の経済」という表題は、まさに当を得たものだと言える。

ともあれ、本論集はさまざまに気づかせてくれたし、さまざまにことを考えさせてくれた。わたしたちはワイルドがその性的嗜好をほとんどこれみよがしにひけらかしていたことを知っているし、またこれみよがしに贅沢をしてみせたことを知っている。そしてワイルド裁判の最中に彼が破産宣告を受けたことも知っている。けれども、少なくともわたしは、彼の性的嗜好と金銭的な行動とが、同じひとつの態度のあらわれであることに気づいていなかった。そう、それらを精液の浪費と金銭の浪費という切り口でとらえていなかったのである。それに、『まじめが肝心』における（金銀）複本位制への言及や、『ウインダミア夫人の扇』のなかの“speculation”という語の数回の使用にもなにか意味があるのでないか。ただ、ないものねだりを承知で言えば、「欲望の経済」と題する本論集のなかに、精液の経済や、精液のメタファーとしての血液の経済を真っ向から論じているものがない——ただし、ヴァーノン・リーについての論のなかには金銭としての血液という発想は出てくる——のは残念だ。ステンボック伯爵には“The True Story of a Vampire”（1894）という、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』の先駆けになるような物語だってあるのだから、それにも言及してほしかった。そんな勝手な思いがわくのは、本論集の方向性が豊かな可能性を秘めているからだろう。

19世紀末の文学や美学を経済という切り口から論じようとする試みは、これまでにもなされてきた。本書のイントロダクションが挙げているように、Regenia Gagnier, *The Insatiability of Human Wants: Economics and Aesthetics in Market Society* (Chicago: University of Chicago Press, 2000) や Martha Vicinus, “The Adolescent Boy: Fin de Siècle Femme Fatale?” (*Journal of the History of Sexuality* 5.1 (1994): 90-114)、また Lawrence Birken, *Consuming Desire: Sexual Science and the Emergence of a Culture of Abundance, 1871-1914* (New York: Cornell University Press, 1988) などである。けれども、欲望と経済の接点を、もしくは欲望の経済を、きわめて多様な角度から検証しようとしているという点において、本論集は画期的だと言える。だが、そんなことよりも、19世紀末の文学を研究しようとする者にとって、本論集はさまざまな刺激を与えてくれる嬉しい論集となっているのである。